
生徒会長、挙動不審！

黒木猫人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会長、挙動不審！

【Nコード】

N7342G

【作者名】

黒木猫人

【あらすじ】

俺のバイト先である本屋、エンジョイブックスに姿を現した生徒会長。しかし、その行動はやたら挙動不審であり……？

俺は毎週土曜日、午後の四時から九時までの五時間、自宅の近所にある本屋の『エンジョイブックス』で、バイトをしている。

たまたまバイトを禁止していない高校に通っているため、小遣い稼ぎとして……みたいな感じた。今日はレジ番で、俺はレジの前に立ちつつ、店内を何気なく見回していた。

エンジョイブックスは全国チェーンの店だが、俺のバイトしている店自体はそんなに大きくはない。レジに立っているだけでも、誰がどこにいるか、大体は把握出来る。

同じシフトの佐藤さん（ふわふわ巻き毛の素敵な茶髪の女子大生）は、ライトノベルの棚の前で新刊の整理をしている。

かといって、万引きを防ぐことが出来るかと言われれば、あまり自信はない。高校で運動部に所属しているわけでもなし、殴り合いの喧嘩も小学生の頃に男友達としたのが最後だ。店の死角も決していないわけではない。監視カメラもあるにはあるが、今現在、店にいるのは俺と佐藤さんだけで、誰も確認出来る状況にはない。とはいえ、男の俺が佐藤さんに任せるのも、何だか気が引ける。

店のアナログ時計が示す時刻は、午後六時十分。俺のバイト終了時間まで、あと三時間ほど。

ふと、店のガラス張りの自動ドアが開いた。「いらっしやいませー」と佐藤さんと共に言う。

一人の女性が店内に入って来た。しかも、よく顔の知っている。

高校の、生徒会長だった。

枝毛の一本も伺えない、さらさらの長い黒髪を腰まで伸ばし、額にはトレードマークの紫色のカチューシャ。辺りに漂う凜とした雰囲気と、切れ長の瞳。私服姿は初めて見たが、間違いない。確かに生徒会長である。

あやみね てまり
彩峰手鞠先輩。俺よりも一学年上の高校三年生で、俺の所属する

生徒会のトップだ。真面目過ぎる性格と厳しい方針、加えて空手部の部長も兼任し、空手二段の実力を持っていることから『鉄拳女王』という異名で恐れられている。

習慣とは悲しいもので、学校の外であるというのに、無意識の内に背筋が伸びた。

会長はこちらには気付かず、店の奥の方へと歩いて行く。

その姿を見ながら、会長って制服以外の服も着るんだな、ともし聞かれたらぶん殴られそうなことを俺は思った。

あれ？ というか、この店に来たってことは、会長って割と近所に住んでるのか？

今更ながら、会長のプライベートについて、俺は何も知らなかった。

つか、聞けるわけない。普段、生徒会長の椅子に座って、常時眉間に皺を寄せているようなお人である。事務的な話はしても、それ以外の話をするとな怒鳴られそうで、とてもじゃないが近づくことなど出来ない。

「すみません」

そうだ、会長がレジに来たら、どういふ対応を取ればいいんだろう。全く考えてなかった。

「すみません」

軽く会釈して、「どうも」みたいな感じか？ いや、それとも気付かないフリをして……

「すみません！」

「おわあ!？」

思わず声を上げてしまった。なんと目の前に会長が立っていた。

会長と目が合った。すると、会長は目を丸くする。

「なっ……宝月!？」

「ど、どうも」

レジで向かい合って初めて気付いたが、会長は俺より大分身長が低かった。赤でまとめられた服装が妙に似合う。スカートから覗く

白い足が目を引く。

会長が美人なのは周知の事実だ。しかし……こんなに可愛かっただろうか？

そこで我に返る。会長が眉間に皺を寄せ、じっと俺を睨んでいた。その手には一冊の本。

いかん！ 会長、怒っていらっしやる！

おそらく、早く会計してくれというのだろう。俺は慌てて会長から本を受け取るうとする。

が、会長は俺の手をかわすように、本を動かした。

もう一度俺は手を伸ばす。

ひらり、とかわされた。

もう一度。

ひらり。

「……あの、会長？」

「買う本を間違えた」

「は？」

会長はレジから離れると、店の奥の方へと戻って行ってしまった。一体何だっというのか。

会長はしばらくして、レジに戻ってきた……が、俺の前を通り過ぎて、店の外へと出て行ってしまふ。

「あ、ありがとうございます」と店員なので、とりあえず言うておく。

あれ？ 会長、買いたい本があったんじゃないの？

俺としては、首を傾げる他ない。

……ひよっとして俺、嫌われてる？

少しへこむ。いや、ごめん、嘘。かなりへこむ。

生徒会の人間だからといって、誰しも優秀なわけじゃない。その例が、俺である。

勉強は自分としては頑張っているつもりだが、学年で上位三十名以内に入れた試しがない。運動も苦手ではないが、クラスのヒーロー

ーになれた試しがない。

生徒会メンバーの中で、俺ほど生徒会長の眉間に皺を寄せさせている人間もいないだろう。生まれつき不器用な為に、いつも資料作成で注意を受けている。

勢いだけで生徒会なんかに入るんじゃないやなかつたなあ、と後悔したこととも少くない。立候補する人が少なくて、信任投票だったし。クラスメイトの推薦に背を押されるまま、生徒会室に席を構えることとなった。

俺なりに一生懸命やってきたつもりだけど、会長にはいつも迷惑を掛けてばかりだ。

「宝月くん」

ため息をついていると、佐藤さんがレジ前までやって来て、「さっきの人、宝月くんの彼女？」と尋ねてきた。

「そう見えますか？」

「ううん、全然」

首を横に振る佐藤さん。

でしょうね。俺は背筋を伸ばして、露骨に上下関係が現れていたし。

「学校の先輩ですよ」俺は言った。「俺、学校の生徒会に所属してて、あの人はその生徒会長なんです。でも、どうやら嫌われてるみたいで……」

「そう？ 私には恥ずかしがってるだけのように見えただけ」

「会長が？ まさか」

そんな人じゃありませんよ、と俺は手をひらひらとさせる。

ふと、佐藤さんが「いらっしやいませー」と口にした。見れば、店の自動ドアが開いている。

俺も遅れて言おうとして、

「……あれ？」

来客が、戻ってきた生徒会長であることに気付いた。

会長はレジの前を通り過ぎる際に、ちらと俺を睨む。最初に店に

来た時よりも表情が険しいのは、気のせいじゃない。

佐藤さん。どうやら会長が恥ずかしがっているという説は、大外れだったようです。

横目でふわふわ巻き毛を見つめると、佐藤さんは困ったような表情。いや、というか、俺に向かってそんな顔をされても。

一方の会長は再び店の奥の方へと消えて行く。

何なんだろうか、これは。会長の行動の目的が、俺にはよく分からない。

俺を目の前にして、動揺を見せたかと思えば、何も買わず店から出て、再び戻ってきて。

一言で表すなら、そう、挙動不審である。

まさか……会長に限って万引き

……いや、それはない。俺が会長の何を知らなくても、それだけは断言する。

会長はそんなことをする人じゃない。

傲慢な考えで、単なる自惚れかもしれない。でも、俺は生徒会に入ってから、いつも彩峰手鞠という人を見てきた。

確かに怖いけど、本当に真面目な人で、鉄拳女王なんて呼ばれているが、誰かに暴力を振るったことなんて一度もない。

だとしたら、やっぱり……俺が嫌われているということなのだろうか。

それはそれでショックだが……。

会長が数冊の本を持ってレジに歩いてくる。反射的に俺は背筋が伸びた。

本がレジ台に置かれる。俺は会長の顔を窺いつつ、バーコードリーダーを片手に会計の作業を進めて行く。

会長の眉間にはいつもに増して皺が寄っている。俺とは目を合わせようともしない。

やがて、何時間とも思えるような数分の短い作業を終え、

「どつぞ」

本を詰めた茶色の紙袋を会長に手渡す。

会長は一度俺を見て、頬を引きつらせると、さっさと店の外に出て行ってしまった。

「ありがとうございましたー……はぁ……」
ため息が漏れる。本当、分かりきっていたこととはいえ、へこむな……。

来週の月曜日から、どう接すればいいのだろう。

午後の九時を回ったところで、俺は佐藤さんにレジ打ちを交換してもらった。

「じゃあ、佐藤さん。俺、先が上がりますんで」

「お疲れー。また来週ね」

バッグを肩に掛けて、帰宅の準備をしていると、「ああ、そうだ、宝月くん」と背中に声を掛けられる。

「はい？」

「会長さんのこと、頑張ってるね」

佐藤さんは小さくガッツポーズ。無意味に可愛い。

「はぁ」

としか言えない。残念ながら、おそらくもう駄目な気がする。

俺は自動ドアをくぐり、エンジョイブックスの外に出た。

店の前には、歩道とガードレールを挟んで一車線の道路があり、闇の中を自動車がまばらに行き交っている。六月の夜は比較的過ごしやすく、頬を撫でる風は柔らかだ。喫茶店やレストランが近隣に立ち並び、空には雲の合間を縫って、ぽっかりと三日月が浮かんでいた。

……コンビニにでも寄って帰るかな。何かお菓子でも買って、家に帰ってゴロ寝しよう。うん、それがいい。

「おい」

聞き慣れた声に、背筋が伸びる。

「え」

驚いて振り返ると、店の入り口の脇、ガラス張りの壁に、彩峰先輩 生徒会長が、腕を組んで寄り掛かっていた。

「か、会長！？ 何でここに！？」

「お前のバイトが終わるのを待っていたに決まってるだろう」

「待ってたって……あの時店を出てからずっとですか！？」

確か、会長が最後に店を出たのは午後の七時前くらいだったはずだから、もう二時間以上もここで立っていたということになる。

と、会長が俺の胸倉を掴んで、勢いよく引き寄せた。

俺と会長の顔の距離、およそ十五センチ。会長の息づかいが聞こえてくるほどの近さである。

冷汗が出てくるのは、異性として会長を意識しているためか、それとも単なる習慣のせいか。

会長の眉根は相も変わらず中央に寄っている。こんなに近くで初めて見たが、会長って意外に澄んだ綺麗な瞳をしているんだな、と思った。

やがて、会長はおもむろに口を開く。

「今日見たことは全て忘れる」

「へ？」

会長の発した一言が俺にはよく理解出来ず、頭の中で反芻する。

今日見たことは全て忘れる。

「……何をです？」

「とばけるな！」

そう言って会長は俺を解放すると、自身の鞆の中から、エンジョイブックスのロゴが刻まれた茶色の紙袋を取り出す。おそらく俺が会計を担当したやつであろう。会長は紙袋を開け、買った本を俺に見せた。

「こ、このことだ！ 忘れたとは言わせないぞ！」

先程忘れろと命令したばかりにも関わらず、それを忘れたとは言

わせないというのも奇妙な話ではあるが、とにかく会長が俺に見せた本は三冊。

数学の参考書、英語の参考書、そして

『恋愛タクティクス 十六巻』。

有名な少女漫画で、今年の春にドラマ化、平均視聴率三十八パーセントを叩き出し、社会現象を巻き起こす程の人気になっている作品である。男の俺でさえもよく知っている。

そういえば、今日は新刊の発売日だったっけ。

会計の時は手元の作業よりも会長の様子に気を使っていたから、何を買って行ったかなんて全く覚えていなかった。

「会長も……『恋タク』好きなんですね」

「だ、だから！」会長は再び俺の胸倉を掴んで、言った。「今日のこととは忘れる！ 全て忘れるんだ、宝月！ いいな!？」

暗闇の中でも分かる程に顔を真っ赤にした会長を見て、俺は何だか、ほっとしてしまった。

「良かった」

「何も良くない!」

その後、夜も遅いということ、俺は会長を家まで送って行くことになったのだが、会長は終始、恋愛タクティクスを集めていることについての弁明に徹していた。

……佐藤さん。やっぱり、佐藤さんの言っていたことは正しかったみたいですね。

弁明に必死な会長は、思わず笑ってしまう程に可愛らしかった。

「私はもともと、自分の意思でなく、推薦されて生徒会長になったんだ」

会長は紅茶を飲みながら、俺にそんなことを話した。

「そうだったんですか？ 俺は会長のことだから、てっきり自分で立候補したんだと思ってました」

「よく言われるよ。私は昔から変に真面目な所があつて、一度引き受けた仕事は、何事もきつちりやらないと気の済まない性質だからな。そういう意味じゃ、生徒会向きな人間だったのかも知れない」

人は見かけによらないと言つけれど、会長は恥ずかしがり屋な面も相俟つて、おそらく典型的な勘違いされやすいタイプだったのだろう。実際、俺も見事に勘違いしていたし。

「それにしたつて、やつぱり会長は凄いですよ。俺と違って、やることにそつがないし。素直に尊敬してます」

「確かに宝月は不器用だったな。最初の資料作成の時は、さすがに私も頭を抱えたぞ。あれは酷かった」

ノウハウの欠片も知らなかったから、小学生の落書きのような仕上がりであつた。思い出すだけでも恥ずかしい。

「しかし」会長は言った。「見かけによらないという点では、宝月も一緒だったな」

「え？」

俺は自分の紅茶に砂糖を加え、掻き混ぜようとしていたスプーンの手を止める。

会長は窓の外を見つめながら、

「無駄に根性があつた。最初はただの優男だと思つていたんだが」

「……えくと、それは褒めてもらったつてことでもいいんですか？」

「さて、そろそろ行くとするか」

会長は椅子から立ち上がる。見れば、会長の紅茶カップはいつの間にか空になっていた。

「ちよつ……会長！ 俺まだ飲み終わつてないですつて！」

会長は席を後にして、すたすたと歩いて行つてしまふ。

俺は紅茶を一気飲みして、会長の横に追いついた。

「それで？ 会長、次はどこに行くんです？」

「エンジョイブックスだ。今日は恋愛タクティクスの新刊の発売日だからな。それと」

会長は俺の手を取り、

「私はもう会長じゃない」

あ、怒ってる。

「はい。手鞠先輩」

俺と手鞠先輩は喫茶店を後にして、恋愛タクティクスの二十二巻を探しに向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7342g/>

生徒会長、挙動不審！

2010年10月8日15時21分発行